

『新・やまと物語』（第6巻）

タイトル

- 第28章 や め とのくに げんしゅつ 邪馬台国に現出した洛陽城
- 第29章 りゅうじん むこ 龍神の聲
- 第30章 そうこく 相剋
- 第31章 たまくしげ 玉匣
- 第32章 きみょう しゅうぞく 東海の島の奇妙な習俗
- 第33章 ていしゅん あんび 梯儔の安否をたずねて
- 第34章 ひのみ こ かな 日御子の哀しみ・そして死 けい よ ほ つか うち かく（径百余歩の塚の内へお隠れになる）
- 第35章 つわり ぎしき じゅんそう めひ 悪阻の儀式（殉葬する者、奴婢百余人）
- 第36章 よ せんししゃ ないらん 千餘人もの戦死者を出した内乱
- 第37章 あまのいはや ぎしき ねんれい ち い な まえ う つ しゅつしょう しゅうめい ぎしき 天石窟の儀式（年齢と地位と名前を受け継いで出生する襲名の儀式）
- 第38章 にん ち ぎしき だいじょうさい 女王認知の儀式〔大嘗祭〕

新・やまと物語 (6)

こ が けい さく
古閑炯作



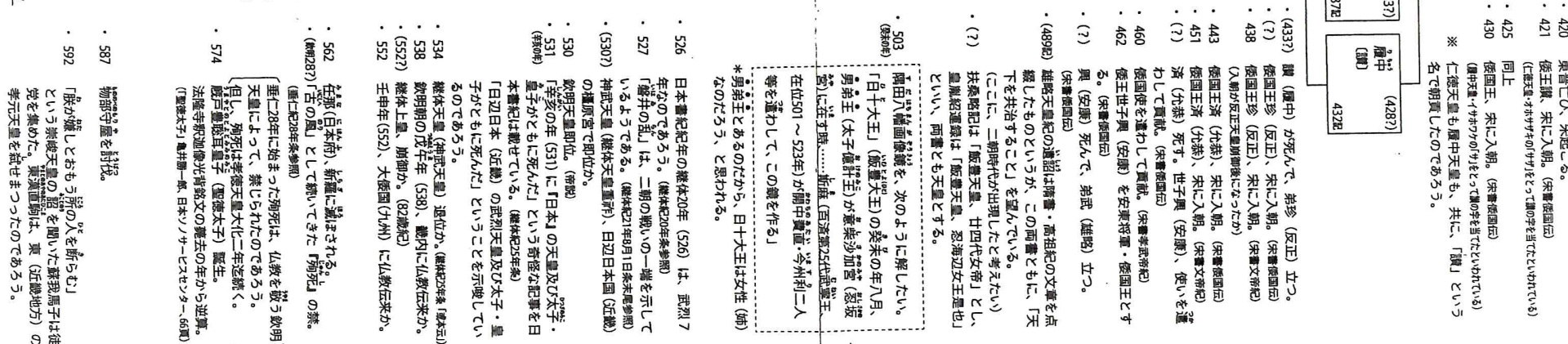
画像提供：東海大学情報技術センター



画像提供：東海大学情報技術センター



(拡大映像)



- ・ 420 天皇に、永年仕ふる。
 - ・ 421 倭王眞、宋に入朝。(宋書倭国伝)
(に表裏をみせかけたりと云う諺を説いていわれている)
 - ・ 425 同上
 - ・ 430 倭国王、宋に入朝。(宋書倭国伝)
(倭王眞、ヤマトのウケをうけての孝宣(たけのひめ)といわれている)
 - ※ 仁徳天皇も履中天皇も、共に、「讀」という名で朝貢したのであろう。

(428?)

(讀)

432E

 - ・ (433?) 讀(履中)が死んで、弟珍(反正)立つ。
 - ・ (7) 倭国王珍(反正)、宋に入朝。(宋書倭国伝)
 - ・ 438 倭王珍(反正)、宋に入朝。(宋書文帝紀)
(入朝が反天(倭)朝臣になったため)
 - ・ 443 倭国王済(允恭)、宋に入朝。(宋書倭国伝)
 - ・ 451 倭国王済(允恭)、宋に入朝。(宋書文帝紀)
 - ・ (7) 済(允恭)死す。世子興(安康)、使いを遣わして貢献。(宋書倭国伝)
 - ・ 460 倭国使を遣はして貢献。(宋書孝武帝紀)
 - ・ 462 倭王世子興(安康)を安東將軍・倭国王とする。(宋書倭国伝)
 - ・ (?) 興(安康)死んで、弟武(雄略)立つ。
(宋書倭国伝)
 - ・ (489E) 雄略天皇紀の遺詔は降書・高祖紀の文章を点綴したものというが、この両書ともに、「天下を治する」とを望んでいる。
(ここは、二期時代が出現したと考えたい)
 - ・ (?) 扶桑略記は「倭書天皇、廿四代女帝」とし、皇胤経運録は「倭書天皇、忍海辺女王皇也」といひ、両書とも天皇とする。

両品(倭書経緯)を、次のように解きたい。

「百十六王」(倭書天皇の終末の年八月、男弟主(太子(倭)諸主)が皇弟加富(尊報宮)に注す時……前倭(百濟第5代雄王)在位501〜523年(か開中寶皇)今州利二人等を遣はして、この鏡を作る」

*男弟主とあるのだから、日十六王は女性(姉)なのだろう、と思われる。

 - ・ 503 (後略)
 - ・ 526 日本書紀紀年の継体20年(526)は、武烈7年なのであろう。(継体紀20年条参照)
 - ・ 527 「雄略の乱」は、二朝の戦いの一端を示しているようである。(継体紀21年01月1日条末参照)
 - ・ (530?) 神武天皇(継体天皇重祚)、日辺日本国(近畿)の瀬原宮で即位ひ。
 - ・ 530 欽明天皇即位。(帝紀)
 - ・ 531 「欽明天皇(531)に『日本の天皇及び太子・皇子がともに死んだ』という奇怪な記事(天武天皇本)が載っている。(継体紀25年条)
 - ・ (530?) 日本書紀は載せている。(継体紀25年条)
 - ・ 534 欽明天皇(神武天皇)退出。(継体紀26年(日本王)数明天皇の庚申年(538)、畿内に仏教伝来か。
 - ・ (552?) 継体天皇、崩御か。(82(崩紀)
 - ・ 552 壬申年(552)、大倭國(ワケ)に仏教伝来か。
 - ・ 562 在皇(日本前)、新皇に就はせられる。
(「古の風」として続いていた「列代」の跡。
(前記に20年条参照)
 - ・ (前記28?) 「古の風」として続いていた「列代」の跡。
(前記に20年条参照)
 - ・ 574 垂仁28年に始まった殉死は、仏教を敬う欽明天皇によつて、禁じられたのであろう。
(但し、殉死は孝徳天皇大化2年遂絶く。
戸部王敏耳子(聖徳太子)誕生。
法興寺聖徳像光背銘文の滅去の年か(逆算。
(聖徳太子)崩御一風、日本ノナラヒスベシタニ(604)
 - ・ 587 物部守屋を討伐。
 - ・ 592 「朕が嫌しとおもう所の人を斬らむ」
といふ崇峻天皇の語を聞いた蘇我馬子は使望を棄てた。東国(東国は、東(近畿地方)の孝元天皇を祀せまつたのであろう。

第2表 前300年ころを中心とする朝鮮半島の歴史と日本の歴史との対比 (想像)

遼寧地方	朝鮮半島	北九州・山口地方 中国・近畿地方
前1100 前1100年頃、周に破れた殷民が、遼寧・扶余地方等へ移住したのであろう。 ○赤褐色の無文土器 ○銅剣 ○銅矛 ○銅戈 ○銅鏡 ○銅鉞 ○環墳墓 ○石棺墓 ○土墳墓	新石器時代 縄文土器時代 前1100 前1000 殷民に追われた者達が、遼寧・扶余地方等から朝鮮半島へ流入したのであろう。 ○無文土器 ・黄褐色で文様は無い。 ・彩色土器も出土。 ・回転台や陶車を使用しない平底の土器。 ○本格的な農耕が始まる。 ・石庖丁が代表的。 ○低い丘陵に集落形成。 ○隅丸長方形の竪穴式住居。 ○方形周溝墓が多数発見されつつある。	縄文時代 縄文晩期 ・真子とは別系統の殷民(扶余系殷民)の子孫渡来か。 ・殷滅亡の紀元前1100年以後あまり年月を経ていないある時、扶余(今の満洲)あたりから、韓国南西部の扶余郡『松菊里遺跡』の地、および日本列島(北九州・中国・近畿地方など)へ渡来したものと思われる。 ●胎土に石粒を含む黒っぽい土器。 ・夜白式土器、刻目突帯文土器、他。 ●高度な稲作技術(板付遺跡『水田』の下層調査により判明) ●石庖丁 ●環墳墓(九州・近畿(大阪府茨木市立文化財資料館開子参照)の両地域に見られる) ●支石墓 ●環濠 ※扶余系殷民の子孫達は、前300年頃、当初の弥生人の支配下に置かれたと解される。
前403 ※遼寧地方には、真子の子孫達が居住したと思われる。 ※赤褐色無文土器、銅剣、銅鏡、鉞等が出土する。	無文土器時代 青銅器時代前期 前300 【扶余郡松菊里遺跡等】 ●青銅器の鋳型が出土した。 ●ジャポニカ種の炭化米が出土。 ●環濠が見られる。 ●円形・隅丸長方形の竪穴式住居が遺存する。 ※真子の子孫達に追われた者等が、朝鮮半島から、日本列島へ大挙して移住したのであろう。 ※日本に弥生時代が始まる。	当初の弥生人 ○弥生式土器 ・茶褐色の明るい色調。 ・縄文式土器に比べると、文様は少ない。 ・彩色されることもある。 ・陶車などを利用しない輪づみ法。平底。 ○本格的な農耕が行なわれる。 ・石庖丁が代表的。 ○低い丘などに集落を営む。 ・隅丸長方形の竪穴式住居。 ○銅製品・木棺等を伴わない方形周溝墓が多数作られた。 ●青銅器 ●環濠集落が各地に営まれた。 ●円形および隅丸長方形の竪穴式住居。(遺存している場合が多い) ●隅丸長方形の竪穴式住居には、ベッド状遺構が見られる。 ●やがて副葬品や木棺等を伴う方形周溝墓が出現する。 ※方形周溝墓の採用を強制されたのだろう。
前256周滅亡 ※真子の子孫達が、遼寧地方から北朝鮮へ移住したと考えたい。 ※燕に奪われる。	青銅器時代後期(I期) 前300 ○銅剣・銅矛・銅戈・銅鏡・鉞などが墓内から出土。 ○鋳造製の鉄斧・鉄鎌なども出土。 ○環墳。 ○隅丸長方形の竪穴式住居。 ○環濠は不明。 真準、韓王となる。 真準、海中の王となる。	○銅剣・銅矛・銅戈・銅鏡・鉞などが墓内から出土。 ○小形銅鐻の鋳型が出土した。 ○赤褐色の無文土器 ・汲田(くんでん)式土器 ・須玖(すく)式土器 ○絹織物。(前97年崇神天皇即位) ○隅丸長方形の竪穴式住居。 ○ベッド状遺構を伴う。 ○墓制 ・環墳墓 ・石棺墓 ・土墳墓 ・支石墓 ※墓内に青銅器等を埋納。 ○版築の技術が見られる。 ○環濠がめぐらされる場合もある。 ※夜白(ゆう)式土器の上に茶褐色の土器(弥生時代当初の土器)があり、その上に赤褐色の土器(須玖式土器を代表とするもの)がある。『季刊考古学』第19号、1987年5月1日発行、雄山閣、24頁。他参照) ※真子達の100余国内の疆界から倭奴国台頭。
前221秦の天下統一 前206 前202	前180 衛氏朝鮮国時代	真子の子孫達が、北九州・山口地方に100余国を置いて統治したのであろう。 唐古・池上曾根 ※唐古・池上曾根等には、扶余系殷民の子孫達が住んでいたと思われる。 ※黒っぽい土器が出土する。
前漢 青銅器時代後期(II期) ○青銅器 銅剣・銅矛・銅戈・小形銅鐻(烏鐻)等か土墳墓に埋納されている。 初期鉄器時代 ○鍛造製の鉄利器も墓内に埋納されている。 ※北朝鮮に留まった真子一族の普通の習俗だったのであろう。	前漢時代 前108 前100 ○銅剣・銅矛・銅戈・小形銅鐻(烏鐻)等か土墳墓に埋納されている。 ○鍛造製の鉄利器も墓内に埋納されている。 ○版築の技術が見られる。 ○環濠がめぐらされる場合もある。	銅剣・銅矛文化圏 銅鐻文化圏 ※大型の銅鐻が作られるようになる。
8 23 25 後漢	原三国時代 0-8	銅剣・銅矛文化圏 銅鐻文化圏

[注] ●印は、「扶余系殷民の子孫達の遺物・遺構」と解釈してみたい。

*次第に明るい色の土器へ変わってゆく。

唐古・池上曾根等には、扶余系殷民の子孫達が住んでいたと思われる。

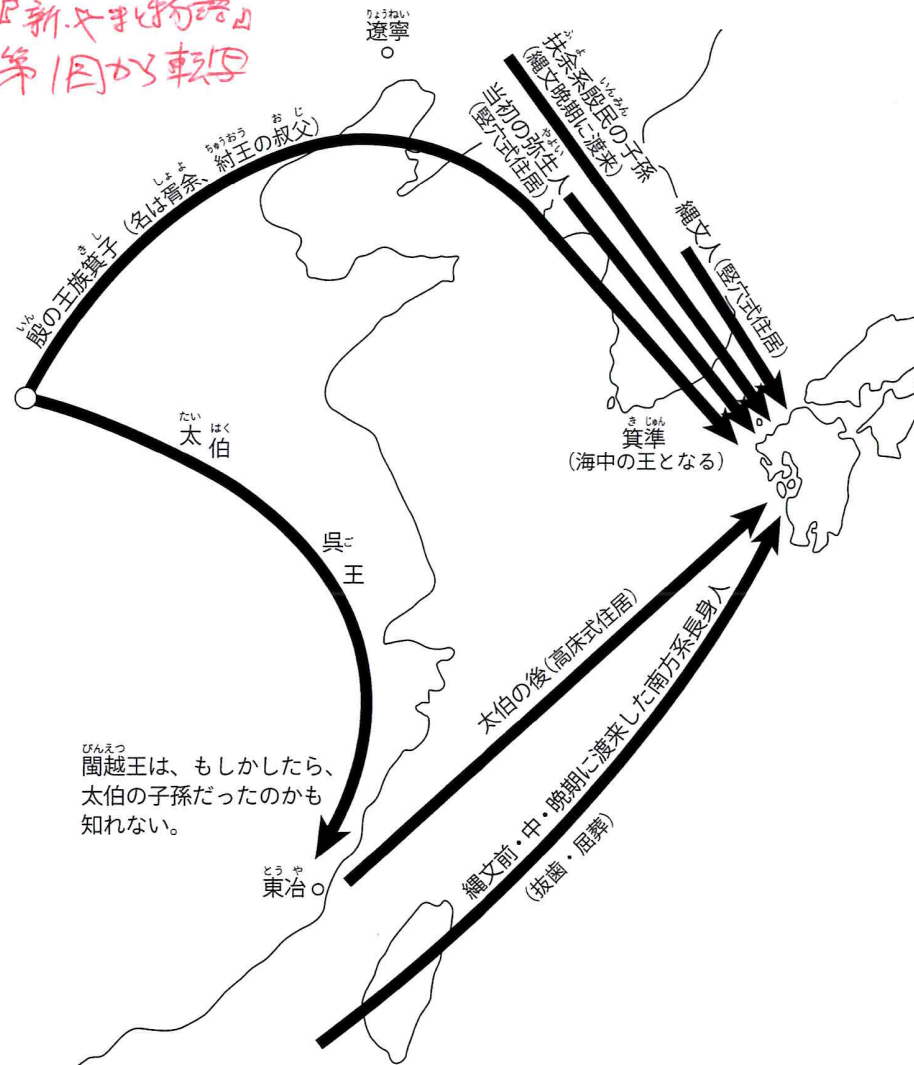
*黒っぽい土器が出土する。

第3表 弥生時代を中心とする時代区分

時代	区分	西暦	出来事	統治者		
				九州	中国	近畿
縄文時代	晩期			縄文人		
弥生時代		前300		当初の弥生人渡来		
	前期	前200	- 前190頃、箕子朝鮮国奪われる。箕子は、南韓の王となる。 - 前180頃、箕子は、北九州・山口地方を領有し、「海中の王」となったか。(「三国志」韓伝)	【箕子達による】 百余国の時代		
		前100	- 前104頃、倭人東遷開始か。 - 前97、崇神天皇即位 (紀)			
	中期	B.C. A.D.		倭奴国 (極南界)		
		(イ)	57、極南界の倭の奴国、後漢へ朝貢。			
古墳時代	後期	-100	107、倭の奴国、再び後漢へ朝貢。	【倭人による】 30余国の時代		
		-200	147 } 倭国大乱 188 }			
		-300	239、卑彌呼、魏国へ朝貢。 248(?) 卑彌呼死。径百余歩の塚が作られた。	男王素(素戔鳴)を追放。素、母の根国を建国。(近畿に古墳出現)		
		-400	(銅剣・銅矛文化圏が、銅鐔文化圏を併合)	〔男王卑弓彌呼素〕(正始8年条)		

〔注〕当表の『時代』および『区分』は、佐賀県教育長、高島忠平氏の見解を基にしている。
(「吉野ヶ里」安本美典、毎日新聞社、156～7頁参照)

・左頁に掲載下さい
 ・『新・ヤマト物語』
 第1図から転写



第1図 六つばかりの種族 (想像図)

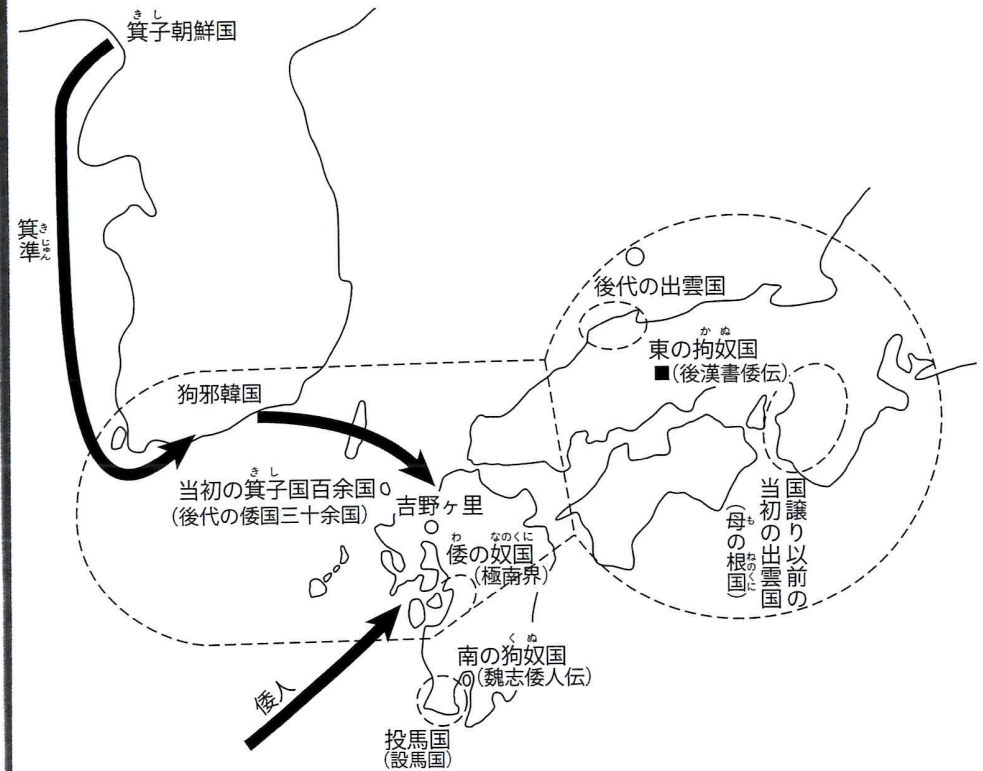
トル

第3表 弥生時代を中心とする時代区分

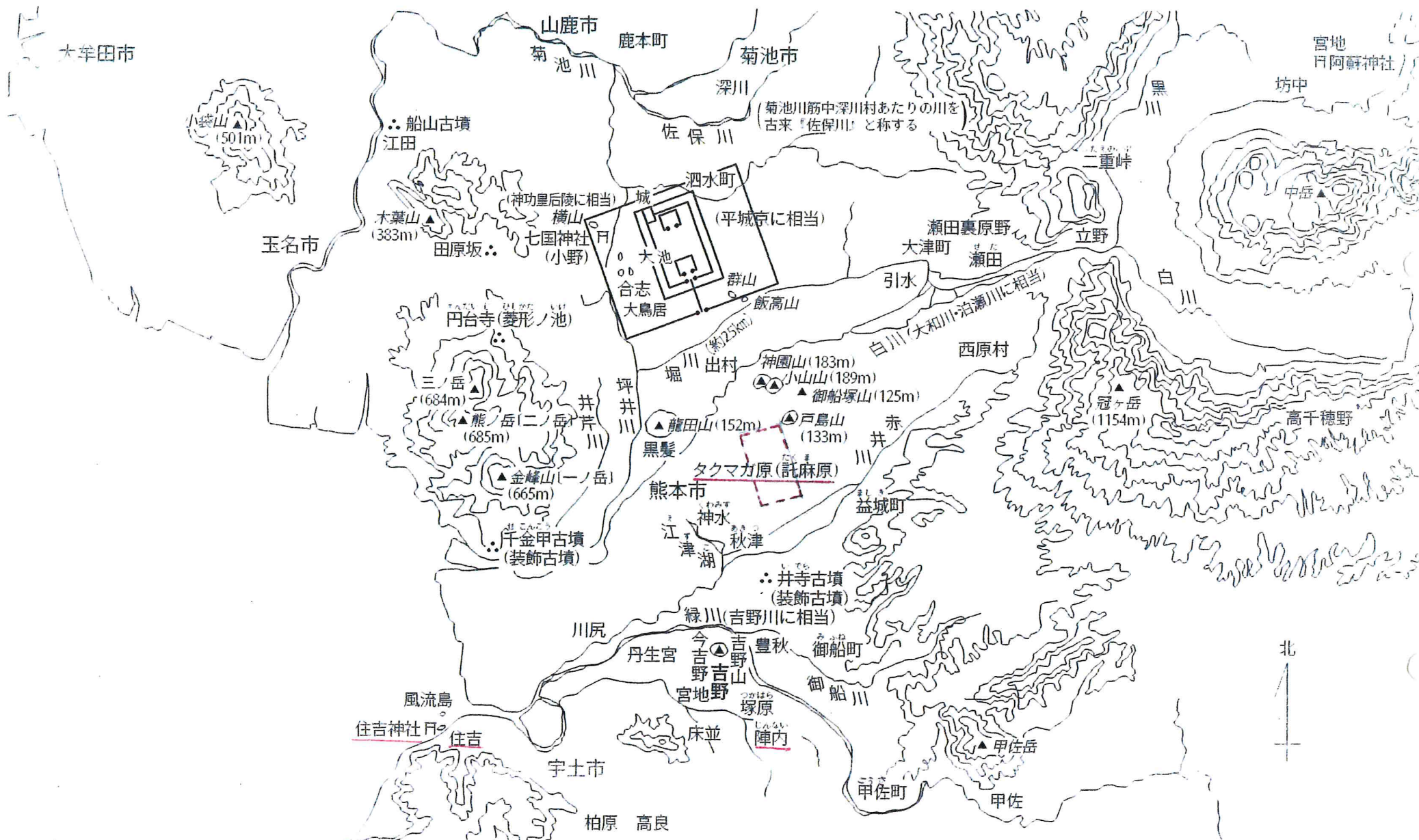
時代	区分	西暦	出来事	統治者		
				九州	中国	近畿
縄文時代	晩期			縄文人		
弥生時代	前期	前300		当初の弥生人渡来		
	前期	前200	- 前190頃、箕子朝鮮国奪われる。箕子は、南韓の王となる。 - 前180頃、箕子は、北九州・山口地方を領有し、「海中の王」となったか。(『三国志』韓伝)	【箕子達による】 百余国の時代		
	中期	前100	- 前104頃、倭人東遷開始か。 - 前97、崇神天皇即位 (紀)	倭奴国 (極南界)		
	後期	B.C. A.D.	57、極南界の倭の奴国、後漢へ朝貢。 107、倭の奴国、再び後漢へ朝貢。 147 } 倭国大乱 188 } 239、卑彌呼、魏国へ朝貢。 248(?) 卑彌呼死。径百余歩の塚が作られた。	【倭人による】 30余国の時代		
古墳時代		-300		男王素(素戔鳴)を追放。素、母の根国を建国。(近畿に古墳出現)		
		-400	(銅剣・銅矛文化圏が、銅鐸文化圏を併合)	出雲国の国譲り [現在の出雲国へ国替え] (銅鐸廃絶)		

〔注〕当表の『時代』および『区分』は、佐賀県教育長、高島忠平氏の見解を基にしている。
 (『吉野ヶ里』安本美典、毎日新聞社、156～7頁参照)

- ・ 右頁に掲載
- ・ 『新・やまと物語』第2冊から転写。

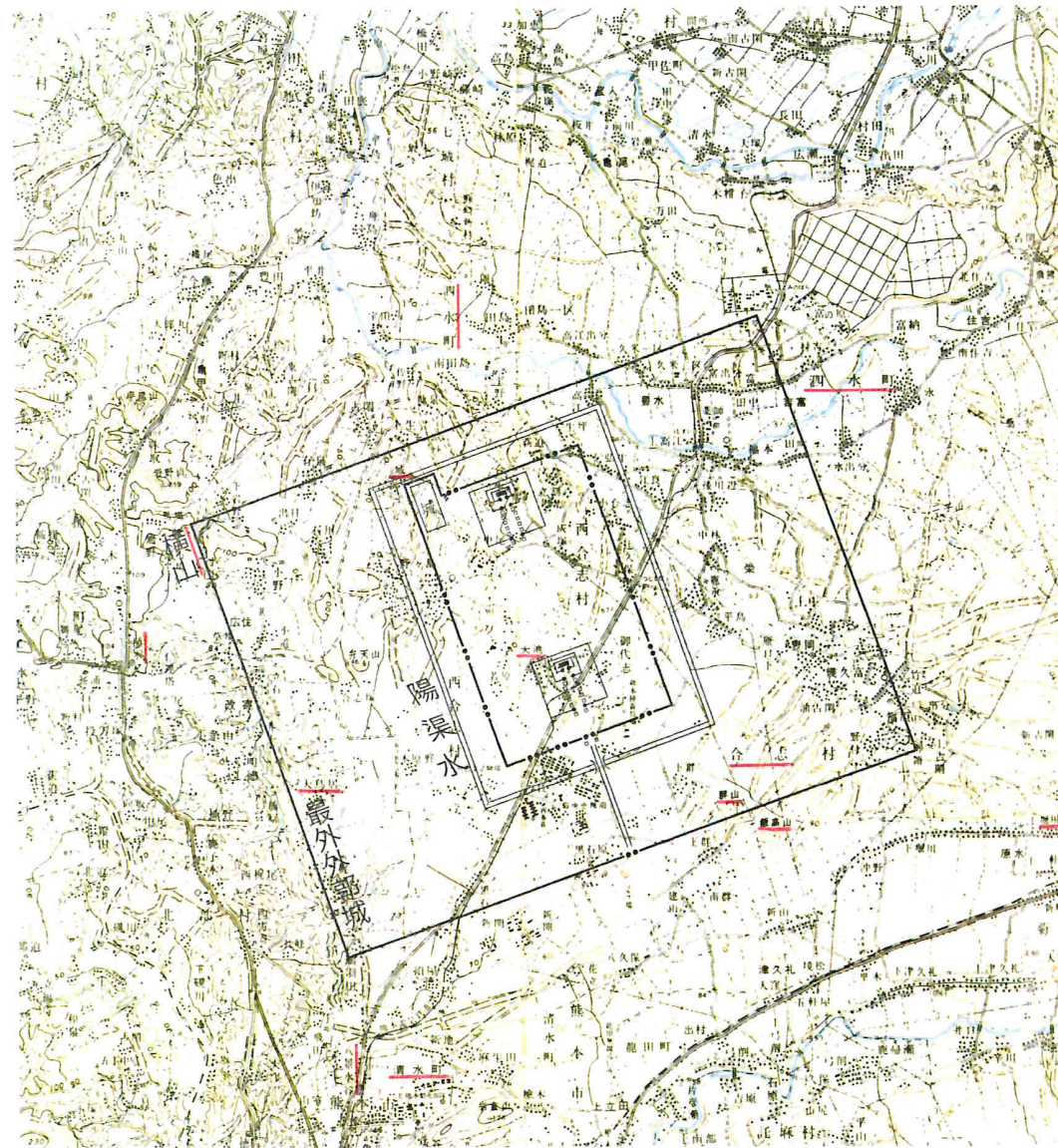


第2図 東西二つの文化圏の対立（想像図）



第12図 曹魏の洛陽城を模した「邪馬台国の都」想像図

[注]「白川中流域一帯に前方後円墳が無い」ということが注目される。



第13図 邪馬台国の「洛陽城」想像図

- [注] ①曹魏代の宮城（九六城）の城壁には、「十二の宮城門」が設けられていた。また、曹魏の明帝は、後漢代の崇徳殿の故処に「太極殿」を建てた、という。
- ②一方、『日本書紀』皇極天皇四年六月条には、「太極殿」や「十二の通門」の記載がある。
- ③合志原の『大池』『小池』について、「聖徳太子当国に《五ヶ所の池》を穿ち給ひしなりといふ」と言い伝えられている。（『菊池郡誌』熊本県教育会菊池郡支会、名著出版、昭和48年1月発行、377頁〈大池小池〉参照）**証拠隠滅のために池が掘られたのだろうか！*
- ※昭和42年6月30日付、国土地理院発行の5万分之1地図「高瀬」「隈府」参照。

第9表 内宮(天照大神の宮)・外宮(豊受大神の宮)・外宮(天照大神の離宮)・
八幡宮の変遷の歴史(想像)



新・やまと物語

第~~三~~卷

六

目次

第1巻

第2巻

第5巻

第6巻

①『新・やまと物語』の題目

まえがき

序論

この物語の主張

系譜

荒筋

『日本書紀』の記載におけるかくれた約束事

新・やまと物語

第一編 神代〔先史時代〕～応神朝

第一章 天地開闢

第二章 激動の黎明期

第三章 極東地域にみられる各種文化についての考察

第四章 北九州・中国・近畿地方の遺跡が語る激変の時代

第五章 東西二つの文化圏の対立(当初の弥生人と箕子の対立)

(以下、インターネット)

第3巻

第4巻

第7巻

第8巻

第六章 太伯の後

第七章 倭国創建(会稽の東治から東遷。箕子国内の極南界に倭奴国を建国)

第八章 垂仁天皇(五十七年、極南界の倭奴国、後漢へ朝貢)

第九章 景行天皇(一〇七年、倭奴国、後漢へ朝貢)

第十章 成務天皇(倭国大乱。倭国、北九州・山口地方に三十余国を置く)

第十一章 仲哀天皇

第十二章 神功皇后(息長足姫尊)

第十三章 三國鼎立

第十四章 洛陽の変遷の歴史

第十五章 衛氏朝鮮以後の朝鮮半島の歴史

第十六章 景初三年春

第十七章 魏国への旅立ち

第十八章 洛陽の都

第十九章 帰途

第二十章 単位

第二十一章 倭国北辺の国々

第二十二章 新王城

第四十二章 朝鮮半島の歴史

第四十三章 応神天皇(中)

第四十四章 東の拘奴国壊滅(中国地方平定)

第四十五章 母国『出雲国』の国譲り(近畿地方を譲り受ける)

第四十六章 応神天皇(下)

第二編 繰り返される二朝の慣例(仁徳朝～崇峻朝)

第四十七章 第二期共立時代(大雀命・宇遲能命紀郎子)

第四十八章 仁徳天皇

第四十九章 謎の世紀『五世紀』

第五十章 裝飾古墳

第五十一章 近畿地方の古墳

第五十二章 墳輪

第五十三章 隠された二朝時代の概要(第一期二朝時代・第二期二朝時代の経緯のあらまし)

第五十四章 平富等大公主(後の継体天皇)の出自について

第五十五章 雄略天皇(「共治国家」「共治天下」を望む遺詔)

第9巻

第五十六章	〔天上国九州の天皇〕 継体天皇
第五十七章	〔日辺日本国の天皇〕 清寧天皇 〔白髪武 廣國押稚日本根子天皇〕
第五十八章	飯豊天皇
第五十九章	顯宗天皇 〔弘計天皇 〔弟〕〕
第六十章	仁賢天皇 〔億計天皇 〔兄〕〕
第六十一章	武烈天皇 〔仁徳系の王統最後の天皇〕
第六十二章	時代の圧縮
第六十三章	第一期二朝時代の終焉
第六十四章	第二期二朝時代の幕開け
第六十五章	欽明天皇 〔天國排開廣庭天皇〕
第六十六章	敏達天皇
第六十七章	用明天皇
第六十八章	崇峻天皇 〔朕が嫌しとおもふ所の人を断 らむ〕
第三編	日本の歴史改編、そしてその後 〔推古朝〕 現代〕
第六十九章	第三期二朝時代 〔天上国の推古天皇・日 辺日本国の等与刀弥々大王〕
第七十章	推古朝の寺院・仏像

第10巻

第11巻

第12巻

第七十二章	阿蘇山
第七十三章	隋の文帝、所司をして倭国の風俗を訪わ しむ
第七十四章	国に二の君非ず
第七十五章	皇太子厩戸豊聰耳皇子
第七十六章	金人の夢告
第七十七章	太子の苦悩
第七十八章	聖徳太子の薨去
第七十九章	蘇我馬子の死、そして推古天皇の崩御
第八十章	舒明天皇
第八十一章	皇極天皇
第八十二章	孝徳天皇
第八十三章	斉明天皇
第八十四章	高市天皇 〔舒明天皇の重祚〕
第八十五章	天智天皇
第八十六章	壬申乱
第八十七章	宗像神社
第八十八章	天武天皇 〔上〕
第八十九章	新城 〔平城宮〕
第九十章	天武天皇 〔下〕
第九十章	持統天皇

第13巻

第九十一章	文武天皇
第九十二章	元明天皇
第九十三章	奈良時代
第九十四章	平安時代 〔上〕
第九十五章	小野小町
第九十六章	平安時代 〔下〕
第九十七章	南北朝時代 〔二朝時代〕
第九十八章	戦国時代
第九十九章	近世 〔安土・桃山・江戸時代〕
第一百章	現代及び未来
あとがき	

第三十一章	玉匣
第三十二章	東海の島の奇妙な習俗
第三十三章	梯儂の安否をたずねて
第三十四章	日御子の哀しみ・そして死 〔徑百余歩の 塚の内へお隠れになる〕
第三十五章	悪阻の儀式 〔殉葬する者、奴婢百余人〕
第三十六章	千餘人もの戦死者を出した内乱
第三十七章	天石窟の儀式 〔年齢と地位と名前を受け 継いで出生する襲名の儀式〕
第三十八章	女王認知の儀式 〔大嘗祭〕

②『新・やまと物語』第4巻の目録

新・やまと物語

第一編	神代 〔先史時代〕 応神朝 〔おうじん かみのよ せんし〕
第二十八章	邪馬台国に現出した洛陽城 〔やまとのくにに げんじょう〕
第二十九章	龍神の舞 〔りゅうしん ぶ〕
第三十章	相剋 〔さうこく〕

追加資料
『支那』

『図・表・写真図版索引』